

『義孝集』本文考 (二)

——勅撰集・私撰集所収歌を中心に——

田 坂 憲 二

前稿において筆者は、細川文庫本系（一類本系）『義孝集』の諸本を再検討し、それらを三群に分けることができるとい^(注1)う結論を得た。とりわけ、細川文庫本と本文・傍記の関係が微妙に交錯し、一見別系統の伝本であるかのよう^(注2)な観のある京都大学本も又、細川文庫本系統に属する一本であることを確認できた。

細川文庫本（一類本）系諸本の位置づけを承けて、次に二類本諸本との比較に移るわけだが、そのうち本稿では、細川文庫本と、二類本を代表する書陵部蔵正安本・乙本が、『義孝集』以外の文献とどのような関係にあるのかを考えてみる。他文献に引用される『義孝集』歌を検討することによって、今日の『義孝集』の系統分化の萌芽がどの時点で確認できるのか、どの系統の本文が勅撰集の材料と

して使われているのか等を明らかにしてみたい。

猶、正安本・乙本は二類本中の下位分類として分けられるものであるが、両本とも若干本文に損傷があるため、あえて併用して一類本の代表たる細川文庫本と比較することとした。

一

考察を始めるに当り、『義孝集』歌が、他の勅撰集・私撰集・物語・説話等ほどの程度採られているのかを鳥瞰するために一覧表を示しておく。猶、本稿において使用する歌番号は細川文庫本のそれであり、『私家集大成』のもの^(注3)と一致する。又、歌番号をカッコで囲んでいるものは、義孝自身の詠ではないことが明らかかな歌である。

歌番号	初句	文 献 名 ^(注2)
1	つらからは	『拾遺』十八、雜賀、1198。『拾抄』九、雜上、449。『続詞花』十七、雜中、810。『後六々撰』、『新時代不同歌合』上。
3	かたるとも	『続詞花』十七、雜中、810。
4	秋はなを	『和漢朗詠』上、229。『撰集抄』
5	つゆくたる	『夫木』十、秋一、3998。
6	ゆふくれの	『詞花』上、雜下、396。『後葉』十五、哀傷、414。『榮花』花山たづぬる中納言。
7	いまはとて	『後拾』十、哀傷、567。『後六々撰』。『榮花』花山たづぬる中納言。
8	はねならふ	『榮花』花山たづぬる中納言。
10	春かせの	『続古』一、春上、64。『和漢兼作』二、春上。
12	きみかため	『後拾』十二、恋二、669。『後六々撰』。
15	わすれても	『百人秀歌』。『百人一首』。『新時代不同歌合』上。『二八要抄』恋三。
17	あふさかや	『後拾』二十、雜六、1212。
18	あやしくも	『夫木』二二、雜四、9956。
21	人しれぬ	『拾遺』十八、雜賀、1191。『実方集』戊本、227。
23	ならされぬ	『新勅』十一、恋一、646。『二八要抄』恋四。
(26)	むらさきの	『後拾』十六、雜二、947。
27	さくらはな	『拾遺』七、物名、360。『拾抄』九、雜上、482。
42	ありあけの	『続詞花』十九、物名、922。
44	よをさむみ	『続後撰』十七、雜中、1117。
		『実方集』戊本、278。

46	わひぬれは	『続詞花』十一、恋上、503。
(49)	ちるにつけ	『後拾』十九、雜五、1106。
53	いつまての	『新古』十二、恋二、1113。『新時代不同歌合』上。『二八要抄』恋六。
(54)	みをつみて	『万代』十三、恋五、2597。『続後拾』十四、恋四、949。
60	ぬす人は	『続詞花』二十、戯笑、983。
61	さよふかく	『実方集』戊本、278(44ノ重出)。
64	さくらはな	『新千』二、春下、139。
(65)	このはるも	『新千』二、春下、140。
68	はるさめも	『続後拾』十八、哀傷、1234。
69	はなす、き	『夫木』十一、秋二、4361。
(73)	よそへつ、	『新古』十六、雜上、1494。
74	しはしたに	『拾遺』十六、雜春、1080。
75	しかはかり	『後拾』十、哀傷、598。『大鏡』伊尹伝。
76	きてなれし	『往生極楽記』三四。『今昔』二四、三九。『袋草紙』。
77	しくれとは	『後拾』十、哀傷、600。『今昔』二四、三九。『袋草紙』。
78	むかしは契き	『後拾』十、哀傷、599。『大鏡』伊尹伝。『今昔』二四、三九。『江談抄』。『袋草紙』。『宝物集』。『大鏡』伊尹伝。『往生極楽記』三四。『法華験記』下、百三。『今昔』十五、四二。『江談抄』。『袋草紙』。『宝物集』。『扶桑略記』。『帝王編年記』。『元亨釈書』。

管見の及んだ限りでは、『義孝集』歌全体の約四割に当る三十三首（うち漢詩一連を含む）が、三十以上の文献に収められている。同一の和歌が複数の文献に採られていることも少なくなく、延べ歌数は約七十首となり、『義孝集』諸伝本との関係を考える上で不足はない。以下、具体的に検討していく。

二

まず、義孝の死後まもなく成立した『拾遺和歌集』と『義孝集』との関係からみていく。

『拾遺集』に収められている『義孝集』歌は、182674の四首である。このうち、126は、歌句に全く異同がない。

18番歌を細川文庫本で示す。

右衛門ないしのもとに宮少将といふ
左衛門督の命婦のもとに権中将となのりて宮のお

はしたりときゝてやる

あやしくもわれまたきぬをきたるかなみかさのやまを
人かられて

「宮」は『拾遺集』1191の詞書によれば「兵部卿致平のみこ」となるが、『義孝集』諸本に異同のある相手の女性の名（正）② 衛門内侍、正 傍書は衛門命婦）は、『拾遺集』

では「かよひ侍りける所」とあり特定されていない。

第二句は『拾遺集』、正安本、乙本、何れも「わかぬれきぬを」となっており、その親近性を窺わせる。細川文庫本は、これらの何れかとの異同を傍記していると思われる。第五句の傍書に該当する「人にかくれて」の本文を持つ文献は見当たらない。

猶、この歌は、「かよひ侍りける女のもとに、さねかたとなのりて、人のまかりたりけるときゝて」との詞書で『実方集』戊本にも収められている。(注3) 歌詞は、正安本、乙本、『拾遺集』のものとは一致する。勿論、本来の詠者は義孝であるが、実方自身にも同じような状況下で詠んだ歌が存しており、この辺りが異伝の生じた理由ではなからうか。

次に74番歌を検討する。『義孝集』本文を73番歌と共に、細川文庫本で示す。

はゝうへ東宮にさふらひ給しにいとまにてひさし
うまいり侍らさりしかはなてしこにつけてたてま
つりし

よそへつゝみれとつゆたになくさますいかゝはすへ
きなてしこのはな

御返し

しはしたにかけにかくれぬほとはなをうなたれぬへし

なてしこのはな

母恵子女王と義孝との贈答歌である。73番歌の方は『新古今集』十六、雑上にも「贈皇后宮にそひて、春宮にさふらひける時、少将義孝ひさしくまるらさりけるに、なてしこの花につけてつかはしける、恵子女王」として収められている。

ところが、74番歌の方は『拾遺集』十六、雑春に、次のような形で入集しているのである。

一条摂政の北の方ほかに侍りけるころ、女御と申しける時

しはしたにかけにかくれぬ時は猶うなたれぬへきなてしこの花

『義孝集』の詞書では、恵子女王が東宮（師貞親王。当然その母女御懐子も含まれよう。『新古今集』ではそのことを明示する）の許にいた時、義孝が久しく参上しなかつたという状況設定であったが、『拾遺集』では、恵子と懐子（贈皇后宮）が離れていたとなっており、事情が全く異なってしまうている。一体「しはしたに」の歌の作者は懐子・義孝のどちらなのであろうか。

義孝の死後から遠からぬ成立の勅撰集を重視すべきかとも思われるが、一方で、『義孝集』の二首の詞書や和歌の対応も見捨てがたい。又、『拾遺抄』には該当歌は収めら

れておらず、『新古今集』は『義孝集』に拠ったものであろうから、参考にはなるまい。本来の作者が義孝、懐子のいずれかという結論は、今は留保しておきたい。

何れにせよ、現存『義孝集』と『拾遺集』とは、このように相互に齟齬をきたす面も持っているのである。『拾遺集』の撰集材料となったのは、今日の形の『義孝集』ではなかったと思われる。

次に、『栄花物語』所収歌についてみてみる。

『義孝集』6、8番歌は『栄花物語』花山たづぬる中納言、の冒頭近くに重出する。当該部分を細川文庫本で示す。

殿やみたまひしころいかゝと人のとひたるに

天禄三年の秋女のかりやるイ

ゆふくれのこしけき庭をなかめつゝこのはとゝもにおまくれつるなみたかふるなみたかな

うせさせ給にし御いみはてゝ人ゝにおはしわかるゝひとの、中將のもとへイ

いまはとてとひわかるめるむらとりのふるすにひとりなかむへきかな

修理かみ返しこれた、

はねならふとりとなりてはちきるともきみわすれすはわか

われもわすれし
うれしとそおもふ

『栄花物語』の記す所も、『義孝集』の詞書とほぼ同様であり「人の御心地いかかと訪ひきこえたるに」^(注5)「修理大夫惟正かへし」のように、表現そのものも一致する所があり、両者の関係が緊密であることを伺わせる。恐らくは、『栄花物語』が『義孝集』を直接参照したものであろう。^(注6)ところで、細川文庫本『義孝集』6・7番に詞書には、

それぞれ十字前後の異文傍書があるが、この部分は、『義孝集』諸本をはじめ『栄花物語』その他の文献にも見出せぬものである。もし、6番傍書のいうように「女」がこの歌を贈った相手とすれば、義孝が自己の心情を極めて率直に吐露していることから、この数か月後に一子の行成を生む源保光女などが相応しいのかもしれない。^(注7)

次に、和歌部分の異同について述べる。

6番初句は「ゆふくれの」の本文を正安本が持つのに対し、細川文庫本の傍書「ゆふまくれ」は乙本、『栄花物語』、『詞花和歌集』396、『後葉和歌集』414の本文である。『詞花集』は『栄花物語』もしくは乙本系の『義孝集』から、この歌を採入したのであろう。^(注8)

6番五句傍書の「ふるなみたかな」は、『義孝集』諸本、『栄花物語』、『詞花集』、『後葉集』の何れにも存しない独自のものである。

7番歌は『後拾遺集』『後六々撰』にも収められているが、大きな異同はない。ただ、第二句は『栄花物語』のみが「わかれぬる」とあるが、『後拾遺集』の中でも書陵部本(403・12)はこれに一致する。『義孝集』諸本はいずれも「わかるめる(めり)」である。猶、乙本は四句「ふるすにすくすへきかな」と、この部分、本分、本文に損傷がある。

8番歌第三句の細川文庫本傍書「わかるとも」に一致するものは他に見出しえない。ただ乙本の「わたるとも」が何らかの関連を推測させる。第五句の細川文庫本「うれしとぞおもふ」に近いのは、乙本、『栄花物語』梅沢本の「かれじとぞおもふ」で、細川文庫本傍書の「われもわすれじ」は正安本、『栄花物語』富岡本と一致する。猶、第四句、『義孝集』諸本「君忘れずは」と一致するものも、『栄花物語』富岡本であり、梅沢本では「人忘れずは」である。このように『栄花物語』に採られた義孝歌は細川文庫本・正安本・乙本の何れとも共通異文を形成することがあり、その関係は一樣でないといえよう。

三

次に『後拾遺和歌集』所収歌について検討してみる。

『義孝集』23番歌を細川文庫本で引用し、正安本、乙本

との主要な異同を示す。

左衛門藏人のなをうとかりければうりにかきてイこくれうのおか
しきをつゝみてそれにかきつく

ならされぬかはみそのくれうりときしりイなからよひあか月とた
つそくるしきつゆけき

左衛門藏人——㊦㊧ 衛門内侍

「こくれうの」以下——㊦㊧ こうりにかきて

かはみそのくれうりと——㊦㊧ みはそのうりと

きしりなから——㊦㊧ しりなから

たつそくるしきつゆけき——㊦㊧ たつそつゆけき

この歌は『後拾遺集』十六、雑二、947では次のような形
となつている。

左衛門藏人にふみつかはしけるにうとくのみ侍け
れはちひさきうりにかきてつかはしける

少将藤原義孝

ならされぬみそのゝうりとしりなからよひあか月とた
つそつゆけき

和歌の三句、五句は、細川文庫本の傍書・正安本・乙本・
『後拾遺集』が、細川文庫本に対して完全な共通異文とな
っている。第二句においても『後拾遺集』は少異あるもの
の、やはり細川文庫本よりは、正安本、乙本に近い。

ところが、義孝がこの歌を詠みかけた相手の女性は、

『後拾遺集』が「左衛門藏人」と細川文庫本と一致するの
に対して、正安本・乙本では「衛門内侍」となっており、
必ずしも現存の正安本・乙本と完全に一致するわけではな
い。概ね、正安本、乙本系統の本文に近いという見通しを
得ることができようか。

『後拾遺集』と正安本、乙本との親近性を窺せる用例に
は次のようなものがある。

15番三句 後拾 ㊦㊧ このころの 細 このころは

49番一句 後拾 ㊦㊧ ちゝにつけ 細 ちるにつけ

49番四句 後拾 ㊧ のとけかれとも ㊦ のとけかれと
そ 細 のとかなるとも

49番五句 後拾 ㊦㊧ きみそいはまし 細 きみそいふ
へき

何れも『後拾遺集』と正安本以下が、細川文庫本に対し
て明確に共通異文を形成しているものである。猶、細川文
庫本の傍書が正安本以下に完全に一致することも注目すべ
きであろう。

『後拾遺集』には、『義孝集』歌が八首収められている
が、そのうち前半の五首、7 12 15 23 49番歌は明らかに正安
本・乙本系に近く、細川文庫本と一致して正安本・乙本に
対立するのは、前掲23番詞書の「左衛門藏人」の例だけな
のである。僅か一例であるから、『義孝集』が転写を重ね

る過程で生じた例外的な事例とすることができよう。『拾遺集』や『栄花物語』に引用される『義孝集』の本文が今日の『義孝集』の特定の系統との関連を見出しがたいのに対して、『後拾遺集』では明らかに正安本系と共通する本を有し、細川文庫本の本文とは対立するのである。とすれば、『後拾遺集』の段階では『義孝集』は既に今日の正安本の形に近い写本が存在し、『後拾遺集』はその本文に拠っているとみてよいのではなからうか。即ち、現存する正安本の祖型は十一世紀後半にまで逆上ることができるのである。

ところが、上述の傾向は、『義孝集』末尾三首、75 76 77 番歌において全くあてはまらない。その例を示すと次のようになる。

75 番五句
後拾^① ② わするへしやは ③ 止かへるへし
やは

77 番詞書
後拾^① ② 十月はかりに ③ ④ 七月はかり
に

77 番二句
後拾^① ② ちくさの花そ ③ 止花そちくさに
乙本は中間的性格を示しているが、細川文庫本と正安本
に關していえば、『後拾遺集』との關係が、7 12 15 23 49 の
五首と、75 76 77 の三首では、完全に逆転するのである。即
ち、前半では、正安本が『後拾遺集』に近く、後半は細川

文庫本の方が近いのである。これはどのように考えるべき
であろうか。『後拾遺集』が複数の『義孝集』を資料とし
たとも考えられようが、あまりにも明白に前五首と後三首
に分れるのは納得しがたい。この原因は『義孝集』の側に
あるのではなからうか。

『義孝集』75 番以下は「これはのちにかきそへたまへる
とそ」の文によって始まり、義孝が死後に詠んだとされる
和歌・漢詩から成る、所謂義孝往生説話を形成するもので
ある。『義孝集』の原型を自撰歌集とすれば、^(注9)当然この部
分は後人の追加となるが、現存の『義孝集』に限定して
も、その内容は74 番以前に比べて極めて異質なものであ
る。又、『義孝集』諸本、74 番以前では、細川文庫本と正
安本・乙本との間には、歌順・歌数に出入りがあるが、往
生説話の五首の和歌・一首の漢詩は、諸本一致して末尾に
存している。形態上からも75 番以下は極めて独立性が強い
といえよう。

とすれば、現存『義孝集』の74 番以前と75 番以下は、成
立の次元を異にすると断定してよいであろう。更に推測す
れば、義孝自身の詠歌を集めた家集的部分と、義孝往生説
話の部分とが単独に存在していたのではないか。或いは、
この往生説話は逸書の『義孝日記』の一部を形成するもの
であったかもしれない。それがあある時点で家集的部分に説

話的部分が付載されよるような形で、今日の『義孝集』が成立したのである。そして、その時点とは正に『後拾遺集』の成立前後ではなかったと思われる。従って、『後拾遺集』の段階では往生説話の部分は極めて流動的な状況にあり、少なくとも『義孝集』の末尾部分は今日の細川文庫本・正安本のような形に固定していなかったのではないか。そしてそれが、『後拾遺集』と『義孝集』の関係において、前半五首と末尾三首との間に奇妙なねじれを生じさせているのではないかと考える。

四

前節に関連して、義孝往生説話について今少し考えてみたい。

この説話は、『義孝集』『後拾遺集』の他に、『大鏡』『日本往生極楽記』『本朝法華験記』『今昔物語集』『江談抄』『袋草紙』『宝物集』『扶桑略記』『帝王編年記』『元亨釈書』等に収められている。そこで、『義孝集』末尾の75、80番歌が他の文献にどのような形で収められているかを一覽できるようにしたのが次頁の表である。^(注10) 人名はその歌の詞書中に現れた人物であり、丸囲み数字は同一書中の歌順である。『義孝集』は細川文庫本である。

まず登場人物についてみてみよう。

75番歌に関しては、妹女御(又は母)に遺言し、母の夢に現れるという形で諸書一致しているから、『袋草紙』の、妹の夢に現れたという記述は、『袋草紙注釈』のいうように誤伝であろう。同じく『往生極楽記』であるが、同書において「しかばかり」の歌は尊経閣文庫本にのみみられるものであり、岩波『思想大系』の指摘のように後補されたものである。ただ、この和歌の第五句は、表に掲げた全ての文献が「わするべしやは」とあるのに対し、同書と正安本のみ「かへすべしやは」とあるのは、両者の関係を窺わせて興味深い。

76番歌については諸本異同はない。

77番歌は、『義孝集』が「せいえむそうす」とあるのに対し、諸本「賀縁阿闍梨」で一致する。この歌については後述する。

78番詩では、実資・高遠らの人名が、次第に77番歌と同じ賀縁に統一されていくことがわかる。

79、80番歌は、『義孝集』77番歌の詞書がここまでかかるとすれば、義孝と「せいえむそうす」との贈答ということになる。しかし、この二首は他書には全く見えない。

歌順に関していえば、死去直後の「しかはかり」、同年秋(又は冬)の「しくれては」「昔契」、翌年秋の「きてなれし」という詠作時期が、『義孝集』や『今昔物語集』巻

75	76	77	78	79	80	文献名
しかはかり	きてなれし	しくれとは	むかしは契き (昔契)	こゝろにも うつろはぬ		初句 『後拾』 哀傷
母妹① 女御	妹③	賀②				『大鏡』 伊尹伝
母①		賀②	実③ 資			『往生』 三四
高① 遠		高② 遠				『法華』 下一〇三
		高① 遠				『今昔』 十五・四二
						『今昔』 二四・三九
			賀① 縁			『江談』
			賀② 縁	賀① 縁		『袋草』
			賀② 縁	賀③ 縁		『宝物』
			賀② 縁	賀① 縁		『扶桑』 『編年』 『元亨』
				賀① 縁		

二四では配列に表われていないのに対し、『後拾遺集』『袋草紙』では正確に詠歌順に並べられていることは注目される。これは後者の方が整理化が進んでいるとみるべきであろう。

さて、右の表の諸書のうち『今昔物語集』以下の諸文献は、その内容から大なり小なり何れも先行の文献に依拠したことは明らかであるが、説話形成の初期段階に位置する『義孝集』『後拾遺集』『大鏡』では表現が微妙に重なり合

い、三者の関係には極めて興味深いものがある。もっとも典型的な形で表われる77番歌の詞書について検討してみよう。

○『義孝集』細川文庫本 うせ給ての十月はかりにせ^①
あさりいえむそうつゆめにちゝのおとゝのをはする所にも
ありてのをへたてゝあにきみとおはするにあにの少将はもの
③をもはしけにて(おはしこの君は心ちよけにて)^④しや

うのふえをふき給をみればたゞ御くちのなるなりけり
などはうへのあにきみよりもこひきこえ給を御心ち
よけにてはおはするときこゆれはいとあはすおほした
るけしきにてたつそてをひきとめてかくの給

○『後拾遺集』⁵⁹⁹、左注 このうた義孝かくれ侍てのち
十月はかりに賀縁法師のゆめに心地よけにて笙をふく
とみるほとにくちをたゞならずになんはへりけるは、
のかくはかりこふるをこちよけにてはいかにといひ
はへりければたつをひきとめてかくよめるとなんい
ひつたへたる

○『大鏡』伊尹伝 さてのちほとへて賀縁阿闍梨とまう
す僧のゆめにこの君たち二人おはしけるかあに前少将
いたうものおもへるさまにてこの後少将はいと心地よ
けなるさまにておはしければ阿闍梨君はなと心地よけ
にてはおはする母上は君をこそあにきみよりはいみし
うこひきこえ給めれときこえければいとあたはぬさま
のけしきにて

猶、『義孝集』のカッコ内の部分は本来は細字傍記であ
るが、これを欠くと笛を吹いたのが兄の前少将であるよう
な構文になってしまう。あるいは「けにて……けにて」と
いう目移りによって脱落した可能性も強い。従って、この

傍書部分も本来は存していたものと考えて補った。因みに
正安本はこの部分を本文として持っている。

さて、上に引用した三書を比較すると記述の細部に至る
まで重なりあうことがわかる。①⑦がそれぞれ相互に対
応するが、特に③④は三、四十字の長文に亘って表現が近
似しているし、又⑥⑦は描写の枝葉の部分であるだけに記
述の重なりが注目される所である。この三文献は相互に書
承関係にあるか、同一素材を淵源としていると考えて間違
いないであろう。

三文献のうち『義孝集』が最も詳しく、①⑦の要素を
備えているが、このうち①④⑦は『後拾遺集』と、①③⑤
⑥は『大鏡』と一致している。つまり、見かけ上は『後拾
遺集』と『大鏡』の義孝説話を統合したのが『義孝集』で
あるかのようになっているのである。

しかし、この説話の骨子の一つである夢を見た人物②
が、『義孝集』と『後拾遺集』『大鏡』とははっきり異なる
ため、『後拾遺集』『大鏡』⇨『義孝集』或いはその逆の関
係ではなく、同一の素材から三者がそれぞれに細部を改め
ながら受け継いだと考えるべきではなからうか。前節で検
討した如く、現存『義孝集』末尾部分の成立と『後拾遺
集』の成立がほぼ同じ頃とすれば、『大鏡』の成立も更に
含めることができよう)、この可能性は一層強まるであらう

う。

現存『義孝集』、『後拾遺集』、『大鏡』の三者が共通のものに材を得ているとすれば、それこそが『本朝書籍目録』にその名のみをとどめる『義孝日記』ではないだろうか。

『篁日記』『高光日記』同様に、仮名の文学で、歌物語の体裁を持っていると推定されるが、内容的には、生前の道心厚き生活ぶりや、死後の生者との魂の交流——往生譚の類——などが描かれていたのではないだろうか。(とすれば、内容的にも『篁日記』『高光日記』に通じるものがあるといえよう。)

さて、最後に『義孝集』のみに見える「せいえむ僧都」について一言ふれておきたい。この部分、正安本は「清因そうつ」、乙本は「せい(マ)そうつ」とある。しかし、群書類従本が「せいみむそうつ」とするため、『今昔物語集』『江談抄』等の注釈書には多くこの形で引用され、又人物考証もあまりなされていないようである。僅かに『今昔物語集』古典大系・古典集成の注で、高遠の父齊敏が「せいみむ」と同音であることに注目しているだけである。しかし、齊敏は僧籍に入っていないからこの推測にはかなり無理がある。何よりも、群書類従本の本文は、細川文庫本の「え」が「み」に近い字体であるために派生したものであろうから、『義孝集』本来の形は「せいえむ」又は「せい

いん」であったと思われる。

私見によれば、この人物は、大江朝綱息、澄明の弟の権少僧都清胤ではないかと考える。清胤は、内供奉十禅師・権律師を経て、正暦元年に権少僧都に任ぜられ、長徳元年五月八日に五十二歳で入滅している。(注14)義孝より約十歳年長である。時代的にも、又僧都という点でも合致する。更に『詞花集』に作歌が二首採られた勅撰歌人でもあるから、義孝を夢に見た人物として相応しいように思われる。賀縁同様に義孝との関連を直接的に物語る史料はないが、清胤の入滅が義孝の岳父源保光と同日である点など、説話中の登場人物となった一因であるかもしれない。

五

再び、勅撰集・私撰集所収の『義孝集』歌の検討に戻る。

第三節で、現存『義孝集』の諸伝本の原型の確立は『後拾遺集』頃ではないか、という推測が得られたので、以降の文献については、現存『義孝集』のどの系統の本文に依拠しているかが問題となる。いわば『義孝集』の享受の跡を辿ることになる。

以下本節では『後拾遺集』以降の文献について一括して述べる。

(1) 『続詞花和歌集』

○27番三句 続詞花 正② さとのには 細さとのにも^は

○27番五句 続詞花 正② みぬかわひしさ 細みぬかか
なしさ

○60番五句 続詞花 正② とりかくすらん 細とりをさ^か
むらん

右三例のように『続詞花集』の依拠した『義孝集』は、正安本・乙本系統である。細川文庫本との共通異文は一例もない。猶、『後拾遺集』と同様、細川文庫本傍書が正安本・『続詞花集』と一致するのが注目される。

(2) 『新古今和歌集』

○53番五句 新古今 ② やますもあるかな 細た^{やますもあるかな}ならぬ
かな 正た^{かな}ならぬかな

○73番二句 新古今 正みれとつゆたに 細みれとつゆた^も
に ② みれともつゆも

○73番四句 正② 細いかはすへし 新古今 いかにか
すへき

右三例にみられるように『新古今集』と『義孝集』諸本との関係は一定しない。

(3) 『新勅撰和歌集』

○21番二句 新勅撰 正こゝろひとつに 細こゝろひとつ^{のうちに}

を ② こゝろひとつを

○21番五句 正② さすそらそなき 新勅撰 さすそらも
なき 細さすかひそなき

右二例の如く『新勅撰集』は、正安本・乙本とやや近いようである。

(4) 『続後撰和歌集』

○42番二句 続後 正② つきはそらにて 細つきのそらに^は
て

○42番三句 続後 山のはの 細山のはの^に 正② 山のは
に

○42番四句 続後 正② ふかくも人の 細ふかくもそらに
『続後撰集』は、正安本・乙本にやや近いようである。

(5) 『続古今和歌集』

○10番四句 続古 こすゑのほかも 細正② こすゑこそ
なを

○10番五句 続古 かににほひつゝ 正② 心ほそけれ 細
うしろめたけれ^{心ほそ}

『続古今集』は、現存の『義孝集』の系統以外のものから採歌している。又、『和歌兼作集』は、四・五句とも『続古今集』に一致する。

(6) 『夫木和歌抄』

○5番初句 夫木 ② つゆくたす 正つゆくたる 細つゆ

むすぶ
くたる

- 5番五句 夫木 正 秋をすくさむ 細 秋をくらさむ
- 17番二句 夫木 正 たひ行人の 細 たひゆく人も
- 69番二句 夫木 ほのむすひつる 乙 ほのむすひてし
- 正 むすひをきたる 細 むすひおきつる
- 69番四句 夫木 正 露も心も 細 露も心の
- 69番五句 夫木 細 乙 とけす見えつる 正 とけす見えける

『夫木抄』所収歌に一定の傾向は見出しがたいが、強い
て言えば正安本にやや近いようである。

(7) 『続後拾遺和歌集』

- 68番初句 続後拾 正 乙 春雨も 細 春雨の
- 68番二句 続後拾 時にしたかふ 正 時に(マツ) たかふ 細 乙 としにしたかふ
- 68番四句 続後拾 正 乙 いまはふるそと 細 いまはふるよと
- 68番五句 続後拾 正 乙 思ふかなしさ 細 思ふかなし

『続後拾遺集』は、正安本系統の本文に依拠しているよ
うである。

猶、『続後拾遺集』949(54番歌)は『義孝集』諸本異同
ないが、その詞書から見て『万代和歌集』から採歌したも

のと思われる。

(8) 『新千載和歌集』

- 65番初句 新千 細 乙 この春も 正 この春の
 - 65番二句 新千 細 正 君をはまちつ 乙 きみとはまちし
- 細川文庫本に若干近いようであるが、どちらも一字ずつ
の異同であり何ともいえないところである。

その他『詞花和歌集』『後葉和歌集』『後六々撰』『百人
一首』『百人秀歌』『万代和歌集』『撰集抄』『新時代不同歌
合』は、『義孝集』と異同が存しない等の理由からその関
係は不明である。

結局、平安末期から室町前期に至る八つの勅撰集・私撰
集のうち五つが正安本系統に近い本文を有しており、この
系統の本文が多く撰集材料とされていたことがわかる。現
存の『義孝集』では、細川文庫本系が群書類従本も含めて
八本確認でき、流布本と通称されるのに対し、正安本・乙
本系は今日四本しか存しない。しかし、中世では寧ろ、正
安本系の本文の方が広く流布していたのかもしれない。
『清慎公集』に混入している『義孝集』が乙本系に近いこ
とも併せて考えるべき問題であろう。

六

以上の検討によって得られた結論を、最後にまとめておきたい。

『拾遺集』『栄花物語』に引用される『義孝集』歌は、今日の特定の伝本との関係は見出しがたい。これに対して、『後拾遺集』では明らかに正安本系の本文に依拠しており、系統の分化はこの頃であつたらうと推測される。

又『義孝集』末尾の往生説話の部分は、家集の大半の部分とは成立の次元を異にし、その淵源は逸書『義孝日記』の辺りと思われる。これらが一つに纏り今日の『義孝集』の形が整うのも、同様に『後拾遺集』の前後であつたらう。以降中古・中世を通じて『義孝集』歌は多くの文献に引用されるが、その際にしばしば用いられたのは、今日では異本系とされる正安本系統の本文であつたと思われる。

注

- (1) 『義孝集』本文考(一)——細川文庫本系諸本の再検討——『香椎潟』31、昭60・10)
- (2) 以下において使用する勅撰集・私撰集の本文・歌番号は、特に断らない限り、『新編国歌大観』のものである。
- (3) 徳植俊之氏の指摘がある。(『藤原義孝の詠作活動』義孝集詠歌年次考——『横浜国大語研究』3、昭60・3)

(4) 十月ある女に、さねかたの兵衛のすけとなのりて、

こと人のきたりけるをききて、女に、
たれならむいかてのもりにこととはむしめのほかにてわ
かなかりけむ

(5) 本文は『栄花物語全注釈』に拠る。

(6) (注5) 書、補説参照。

(7) 細川文庫本の詞書・和歌の傍書の問題については別稿に
ゆずる。

(8) 『後葉和歌集』は『詞花和歌集』に本文・詞書共に一致
する。

(9) 『日本古典文学大辞典』『義孝集』の項。

(10) 『袋草紙注釈』の表を参考とした。

(11) 四〇七頁、補注。

(12) 『今昔物語集』の当該説話については、平田俊春氏『日
本古典の成立の研究』国東文麿氏『今昔物語集成立考』等
に詳細な分析がある。

(13) 本文は『日本古典文学大系』に拠る。

(14) 『僧綱補任』『法華相承次第』に拠る。

(追記)

前稿に掲げた研究文献に左記のものを追加する。

(o) 安元悦子氏作成「義孝集校本」(目加田さくを氏『大鏡

論』(昭54・4)所収)

九大本を底本に新校群書類従本、統国歌大鑑本、正安
本、書陵部乙本、統大鑑本清慎公集と校合したもの。
御示教戴いた目加田先生に御礼申し上げます。